

白山ふるさと文学賞

第四十回暁烏敏賞選考結果並びに選評

(梶田 叡一 委員長)

本年度四十回目を迎えた暁烏敏賞は、例年、多彩な職種や年齢層からの応募をいただいている。本賞に多くの関心が寄せられてきたことは大きな喜びであり、本賞が重ねてきた歴史と重要性を再認識するとともに、今後ますます継続・発展させていく大きな使命を感じている。

なお、本年(第四十回)の応募作品数は、第一部門〈哲学・思想に関する論文〉が三十三点、第二部門〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉が十五点、合わせて四十八点であった。

去る九月二十六日、暁烏敏賞選考委員会(委員長・梶田叡一、選考委員・川村覚昭・山本哲也・氣多雅子・上原麻有子)が、京都市内において開催された。

選考は、「伝統文化の継承発展と次代を担う子どもの育成を図る」という本賞の趣旨に則り、論旨が明確かつ独創的であること、全体の構成が整っていること、および広く市民の啓発に資するものであることなどに留意しつつ行なわれた。

第一部門は、例年にもまして様々な分野の論文が多く、優れた論文が多かったのに対し、第二部門は、残念ながら「該当なし」という結果となった。

選考委員会は長時間にわたる活発かつ慎重な審議を行った結果、第四十回暁烏敏賞受賞者を次のように決定した。

第一部門〈哲学・思想に関する論文〉

入選論文名

横井小楠と中江兆民における「西洋」認識

― 民本思想から民主思想へ ―

田中 豊(研究員)

【選評】(川村 覚昭 委員)

本稿は、福沢諭吉が「古習の惑溺」として近代日本から排除した儒学を、儒者である横井小楠と中江兆民の思想を思想史的視点から読み直すことで、儒学のなかに日本の近代化に寄与する原動力があることを明らかにしている。そして中華思想の根本をなす唐虞三代の政治理念がすでに西洋で実現されていると見なした小楠と兆民の儒学的政治思想を、二人の考え方の相違を明らかにしながら鮮やかに描き切っており、従来の儒学観に対する我々の先入観を再考させるものになっている。特に、兆民が、現代では自明である主権在民が唐虞三代の政治思想に適い、民の自由な意見表明と討論で道理を見つけ出すという公論的民主思想を儒学の視点から論じていることを論証したことは圧巻である。

第一部門〈哲学・思想に関する論文〉

佳作論文名

つかこうへい試論

坂本 正彦（予備校講師）

【選評】（上原 麻有子 委員）

本稿は、戦後演劇史に斬新な演劇シーンを切り開くことで、高く評価された劇作家・演出家、つかこうへいの思想的側面に焦点を当てている。ケンダル・ウォルトンの虚構理論、スチュアート・ホルルの「エンコーディング／デコーディング」論、ロラン・バルトの記号論などを用い、言語記号の意味付与のメカニズムに注目、つかの作品よりむしろ思想を、学術的に分析した本格的な新しいタイプの「つかこうへい研究」である。在日韓国人二世として日本に生きたつかと、ジャマイカに生まれイギリスで活躍したホールに共通する、「ポストコロニアル的環境を通じて培われた鋭敏さ」という類似性に注目したところも面白い。つかの創作力はその特異な人生のおかれた環境が導いたのだという著者の解釈が、本稿をさらに充実した考察に仕上げている。

第二部門〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉

【講評】（山本 哲也 委員）

今回の暁烏敏賞第二部門は残念ながら令和元年第三十五回以来五年ぶりに「入選作品該当なし」となった。選考委員全員の意見一致であった。予備選考を通過した四作品はいずれも豊富な学校や保育現場等の体験に基づいて問題点を克服した力作である。

その一方で時には失敗を重ね試行錯誤を繰り返した末にようやく実を結んだことが容易に想像できるが、その経緯が十分に書き込まれていないことに物足りなさを感じた。成果にたどりつくまでのプロセスこそ重要であり、現状に悩み模索を続けている教育関係者の参考になると思われる。

現場の実情と試みを飾ることなく丁寧に書き込んだ論文が全国の教育関係者から相次いで寄せられることを願うばかりである。